

アンリ・ブランスヴィク

一八世紀のプロイセンの社会とロマン主義

——一八世紀末のプロイセン国家の危機とロマン主義的メンタリティーの発生 (三)

信 岡 資 生 訳

第二章 市民の危機

一、市民の問題

市民層に見受けられる経済的また社会的危機の影響を指摘することはそれほど容易ではない。ごく一般的に言えは「土地っ子」でなくてしかも都市に住む者のすべてを市民と呼ぶことができよう。彼等の身分は、上は貴族とはつきり一線を画されるが、下は他の非貴族、即ち農民とそれほどはつきりした区別があるわけではない。農夫も息子に奨学金をもらえし、その息子は大学で学んで市民となることもできる。たとえばユング・シュティリング博士は貧しい木樵^{きこり}の出である。小学校教師の職はある意味で市民になるコースの中間段階であることがよ

訳者注① 一八世紀のプロイセンの社会とロマン主義

くある。そんなわけで農民と市民の間に絶対的な身分上の峻別は存在しない。もともとプロイセンではフランスよりははっきりした区別が見られる。それはつまり市場税アクトイゼのためで、このおかげで職人は地方に定住できない。逆に貴族の所有地を買い取る権利のない市民もまた田舎に定住しない。その代わりにみんな郊外に庭園を持つことで土地所有欲を満足させている。こういう次第でお城と市民の家、市民の家と掘立小屋での生活様式の身分毎の違いが混ざり合うことはないのである。

しかし市民階級の内部にさえも際限のないヴァリエーションがある。たいいていの都市の統計には人口数とか、ツンフトや重要な産業の一覧表しか載っていないが、いくつかの完全度の高い年鑑によると、都市の居住者を詳しくグループ分けして、とりわけ小手工業者と小売商人を入れている。小手工業者は単独か、もしくは一人ないし二人の徒弟を雇って仕事をする。彼等はいいてい原料賃貸者や雇い主に依存しているが、しかし大きな仕事場で他人と共同で働くわけではない。小売商人は商いの規模にもよるが概して富裕である。マクデブルクの人口はたとえば一八一六年には三万人を数えるが、年鑑によると五十世帯以上を養っている職業に靴屋三百三十一、仕立屋二百二十二（その内八は女性）、指物師百十八、魚屋六十三、肉屋五十八、亜麻布織屋五十四、桶屋・パン屋・「音楽師」五十四を挙げている。五十人以下の人間が従事する職業の中に、町の生活にとって欠くことのできないその他の小手工業者が全部入っている。その中で比較的数字が多いのは錠前屋、火酒醸造者、御者、運送屋で、たった一人しかない職業に彫刻師、暖炉工事夫、塩屋、油屋、タール売り、鳩売りがある。完全なリストが二千三百八十二人の職人を百六種の項目に分類している。一家族を五人と計算すると、約一万二千人、つまり総人口の五分の二ということになる。この年鑑は他方でまた金持のリストも載せている。大商人、問屋、運送業

者が五十三、銀行家、両替商が十三、ワイン業者が十五ある。「工場」^{「ファクトリー」}の数はさほど多くなく、大富豪の印象は

与えない。最も重要なものといえば絹、木綿、羊毛、亜麻布のマニユファクチュア十五と、靴下のマニユファクチュア九である。それに続くものとしてチコリ製造業者十、酢、革手袋製造業者六、縫糸製造業者四、煙草、陶磁器、蠟、リキュール製造業者二、それからたった一人の砂糖、暖炉、パイプ、帯紐、レース、皮革、金銀装具、羽毛ペンの製造業者である。全体として富裕家族の数は百四十六で、これに更に十六人の医師、十三人の外科医、二人の獣医、一人の歯科医、五人の薬屋を加えることができる。こうして裕福な市民は家庭生活を営む約七百二十人の人間から成る。百四人の「年金生活者と少数の学位のある者」、百四十七人の未亡人と「選り抜きの未婚の者」(この中には十一人の貴族が含まれる)も良い地位についていることは疑いない。つまり住民全体の三分の一未満に相当する九百七十一人のブルジョアがいることになるが、そうだとすると三万人の内、年鑑に記載されていない一万七千人の大衆が残る。この年鑑は経済的に独立している者、職業あるいは肩書きを持つ者しか挙げていない。年鑑のリストは不完全であり、牧師や大学教授、あるいは芸術家といった自由職業が「少数の学位のある者」の項目に入っていないと仮定しても、工場で働く労働者の数はそれほど高くはない筈で、したがって残るは著しく高いパーセンテージの貧困にさらされている日雇労働者あるいは乞食である。^{原注(1)}

一八〇四年のハレの年鑑のリストはこれに比べると不完全ながら、やはり同様のことを考えさせる。人口は二万五千人。金持は十二の靴下工場、七つの織物問屋、五十五の外国の産物や煙草や種々の食料品を輸入する店舗を占有している。百八十三人の靴下織屋が三百六人の徒弟を四百八十四台の織機に就かせているが、彼等のためには六十人の徒弟を雇う六十人の布織屋がいる。それに続いて百六十二人の仕立屋、百五十六人の靴屋、大勢の

一八世紀のプロイセンの社会とロマン主義

小手工業者がいるが、彼等の中でツンプフト組織（植民地産食品、靴屋、パン屋、肉屋、鍛冶屋、食料品）に加入している者はごく僅かである。軍人と大学生の数の大きさを物語るのが医者と居酒屋の占める割合の高さである。事実十二人の医者、十七人の外科医、四人の薬屋、二十人の助産婦がいる一方、百四十軒の火酒酒場、三十三軒の火酒醸造所、三十四軒の木賃宿がある⁽²⁾。

これらすべての都市では、教養のない貧しい大衆は全く問題にされていない。彼等はしばしば市や地方の行政にとって重荷となっている。一般に彼等は市民となる権利を持っていない。その権利さえあれば、少なくとも都市の行政の管轄下に入ることが認められる筈であるが。きわめて広義の意味では彼等は市の開催権のある都市で生活しているのだから市民に入る。当時一般に通用していた狭義の意味では——年鑑の記載がこれを証明しているが——彼等は特定の職業を営んでいないとの理由で市民から除かれている。彼等を除外して、都市人口のほぼ半分を占める独立自営業者のグループを考察すると、市民を構成する者すべてに固有であると同時に身分を示す手がかりとなり、身分差を定める二つの目立った特徴が明らかになる。それは即ち市民は蓄財を有し、ある種の知的教養を備えているということである。私的資本主義のまだ存在しない国では、彼等の貯金の高は知れている。しかし牧師や手工業者のささやかな蓄えに限って言っても、子供をラテン語学校にやれたり、息子に奨学金をもらうことを当てにしないで大学へやれるほどである。

彼等の教養は浅薄で、付焼刃であるかもしれないが、いずれにしても貴族の場合も似たようなものである。しかし、聖職者と結びついて一体となることで、市民は道徳的見解をいわば独占する。この特徴はプロテスタントの諸国では特に強いと言わなければならない。たいていの市民は牧師を父に、息子に、あるいは兄弟に持っている

る。こうした貴族のライバルたちは、その生活様式よりもむしろ良心と道徳観念の相違によって貴族と区別される。貴族は威光を笠に被っている。生まれてこのかた独自の領域の中で行動し、その領域の内では条件反射さながらに單純至極、自然にその特権を受け止めている。一方市民は自分で規範を立てなくてはならない。彼等の頭の中は基本的には道徳的である。自分たちの見解や感情を表現できるのは、とりわけ筆の立つ連中である。彼等は独自の言葉を思索しようとする者に押しつける。個人が固有の表現手段を生み出すことはめったにできないから、思索しようとする貴族は市民流にしかやれなくなる。そこでプロイセン王国の世論は市民階級のそれとなる。理性というもののは疑いもなく普遍的である。だから市民の行動原理を一つの社会的身分と結びつけようとするのは幼稚な考えかもしれない。しかし理性だけではまだ思考方法は生まれない。時代と環境に応じて理性は、状況や技術者の社会的条件の中であれこれ問題を立ててこれと取り組むのである。そこで、プロイセンの市民が教養をほとんど独占しているからこそ、彼等は世紀末に投げかけられた重要な問題にほとんど常に悩む。以後は彼等に与える経済危機の影響が理性を上回り、十八世紀のプロイセンの歴史をさまざまなニュアンスをつけながら千差万別に彩るのである。

当時の不完全な統計では市民の出生率の詳細を明らかにすることは不可能である。しかし他の住民層と同じ程度の高さであったことを疑う根拠は存在しない。同時代の回顧録にはほとんど子供の多い家族だけが扱われている。読者はしばしば、主人公が苦楽の中に新しい子孫をもうけ、子供たちを国中に散らばせ、どこへ旅をしても子供と会い、兄を妹に紹介し、商用旅行で各地を忙しく駆けめぐって財を成し、子孫に良き教訓を授けるのを読むと、様子がよくのみこめず、戸迷いを覚えるのである。こうした子沢山の話がなくても、都市の住民は増えて

いるという事実がある。その原因が出生率にあらうと移住にあらうと、とにかく都市の人口は伸びて行く。これは社会的に見ると本質的な根本問題である。というのはこれが一番悩みの種であり、解決の難しい市場問題を惹き起こすからである。しかしそれなのにこの事実はごく一般的な局面の中にさえ入ってこない。これに関してはほとんど問題にされず、懸念の言葉も見受けられない。流浪者や乞食はさまざまな扶助を受けるか、あるいは追っ払われるかで、彼等は大きな戦争の起こるのを期待している。戦争になれば生きる機会がたっぷり生じる。でなければ死ぬまでだ。しかし彼等もやっぱり裕福な市民、官吏、牧師の息子であることに変わりはない。

富裕市民の息子の中には、父親の手職や商売を継ぐ者もいるが、大学へ行く者もいる。大学へ行くのは教養の要請からでもあるが、市場の不足のためにそれを強いられることもある。当時も今日と同じように学生数の突然の上昇は一種の失業現象なのである。時間を稼ぎ、才能を身につけて職を見つけるチャンスを増やすために大学へ行くのである。

大学生の増加に疑問の余地はないのだが、その査定は難しい。学籍登録簿はフランクフルト・アン・デア・オーダー大学を例外として公開されなかった。他方公表されている数字も怪しいものといえる。それはヴェルナー^②政権のためで、彼は学生をプロイセンの諸大学から遠去けたし、また法学部の学生を増やして神学部^③の学生数を制限している。そうしたわけで、一七九〇年以前の学生数を一七九七年以後の数と比べることで満足し、五年とか十年間の平均をとることは諦めるしかないのである。本当はこうすればいっそう確実な情報が得られるのだが。しかし、望ましい詳細なデータをすべて入手したとしても、それを扱うにはよほど慎重にしなければならない。というのも、プロイセン王国内の五つの大学の一つで学業を修めるべしという未来の官吏に課せられ

た指令にもかかわらず、多数のプロイセン領民が他国の大学に入学したし、また他国からも大勢プロイセンの大学に勉学にやってきたからである。この世紀の終わりの要職に就いた官吏の中にも、シュタインやシュトルーエ^④ンゼーのように王国内の大学を出ていない者がいる。学期毎に大学構成員の数は増えたり減ったり、入れ替ったりして、自国民の割合は確定できない。こうしたことの留保付きの上でなら、公表数字は、同時代人の見解を裏書きするものであるといえよう。即ち、彼等の言うところによると学生数は漸次上昇している、ヴェルナーの失脚後ですら法学部は神学部を犠牲にする形で拡大されていく。実際人員過剰の教会に職を得ることはますます難しくなっているのである。

きわめて有名な大学のあるハレでは、神学部の学生数は一七八九—一七九〇年の冬学期が五十四名、一七九〇年の夏学期が百五名、一七九八—一七九九年の冬学期七十名、続く夏学期は九十九名を数える。同じ時期の法学部では、三十、五十三、七十八、四十九名で、つまり一七八九—一七九〇年には合計二百四十二名、一七九八—一七九九年には二百九十六名が学籍簿に登録されている。これと同じことがケーニヒスベルクについても言える。ここでは一七九〇—一七九一年の冬学期の神学部学生が十名、一七九一年の夏が十二名、一七九九年の夏が三名、一七九九年の冬が八名であるが、法学部学生数は同じ時期で二十、十五、四十四、二十三である。つまり一七九〇—一七九一年間の学生総数五十七名に対し、一七九九年の夏と一八〇〇年の冬は七十八名である。フランクフルトでは年次統計によると一七八八年は十六名の神学生と三十五名の法学生、一八〇〇年は十五名の神学生と九十四名の法学生となっている。一七八八年と一八〇〇年の間の各年の学生総数は四十八、五十五、四十七、五十三、六十二、四十六、六十、七十、七十一、八十四、九十七、四十九、九十九である。この数字は、政

一八世紀のプロイセンの社会とロマン主義

治的事件の反映度の強い規模の大きな大学に比べると変化は少ないが、小幅ながら確実な増加を示すもので、このことはケーニヒスベルク、デュースブルク、エルランゲンでも確認できる。⁽³⁾

若い市民層の中には父親のあとを継ぐ者もいる。職人として、商店主として、あるいは銀行家として彼等は古い伝統を継承する。彼等の存在は何の問題も起こさない。また中には貧困の中に人生を送り、墮落して行く者もいる。山師、兵隊、流浪者、乞食となって彼等は国や社会の末端で暮らす。国や社会はただ彼等を援助するか、もしくは彼等の墮落を早めるばかりである。更に、中には大学へ進む者もいる。父親の理解できない理論を理解することを覚えて、彼等は市民階層のみならず、プロイセンの、全ドイツの精神的エリートを表す。ナショナルとインターナショナルを問わず市民階級の問題は、彼等に将来を保証してやることにある。彼等のフレッシュな名誉心を満足させる分野は、官吏、聖職、自由業である。

二、公的活動

公職の中には、先ず高い位ではないので問題にする必要のないものが多数ある。ギムナジウムや大学の学部で何年も過ごした自由思想の若者たちは、自らのプライドを落としてまでそうした将来性のない執行吏としての低いポストには就こうとしない。仮りに給与がよくても彼等は自己の価値と品位をよく自覚しているので、そうはしないであろう。彼等には小学校の教師とか、あるいは秘書、記録係、書記、浄書係などの呼称で役所に多勢働いている事務屋の生活よりも、リスクをはらむ山師の生き方のほうが羨ましくさえ思えるのである。税務署の中でさえ、たいして取り柄のない者が働いており、とりわけ元兵士が目立つ。たとえば一七七六年六月二十一日か

ら七月二十一日までの間に雇用された十八名の職員は全員貴族ではなく、十名が廃疾兵、二名が下士官、一名が曹長である。翌月も三十八名の採用者の中、十五名が廃疾兵、下士官が一名、少尉二名。一七七六年十二月二十一日から一七七七年一月三十一日までの間に二十五名を雇っているが、その中、四名が貴族で九名が廃疾兵。一七八四年一月一日から三十日までの間は三十四名の採用者中、四名が貴族、二名が兵士で一人は元少尉、一人は元上等兵。フリードリヒ二世の没後、それまでもう既に少なかった貴族の占める割合は更に減るが、軍人の占める割合も減って行く。一七九〇年一月の十八名、一七九一年十月の十名、一七九四年十月の十七名、一七九六年二月の二十九名、一七九六年十二月の三十六名の採用は専ら貴族でない者ばかりである。貴族の子弟は原則としてこうした下級のポストを拒み、教養を身につけた市民もそうしたポストを貧しい者に委ねたのである。⁽⁴⁾

市民が就こうとしなかったポストの中には、手に入れることのできないものもある。たとえば政府の中でも郷長、郡長^{ランドラート}のエリート職は大へん魅力がある。それらは地方の陸軍官房あるいは直轄官房の配下にあつて、一般に大きな知行地に区分された領地の行政を任せられている。国家もこれらの官職を、地主の暴政を黙認しない自由な市民に委ねる気持がないわけではない。しかし地主を貴族でない者の直接の配下に置くことは革命を誘発することになる。領邦議会にまとめられ、既に国王の陸軍官房、直轄官房によってあらゆる実権を奪われている貴族は国王への忠誠を拒むかもしれない。政府が思い切ってとることのできる唯一つの策は、こうした貴族たちを郷長に任命することである。彼等は自分たちの治める地方のことに不案内でよい。他方、閉め出された市民は、都市行政で王権を代表する税務顧問官のポストをそれほどではないにしても独占する。たとえば一八〇六年ではクーアマルクの陸軍官房、直轄官房に従属する十七名の税務顧問官の中、貴族は二名である。⁽⁵⁾

一八世紀のプロイセンの社会とロマン主義

陸軍の内部で、市民は指揮官になれないという規定がこれまただんだん遵守されなくなり、市民の方でも、昇進が遅くなる平和の時期が長く続いた後では、貴族出の同僚からの罵言を浴びたり、軍の権威に敬意を払わない知識人に皮肉られたりすることにがまんできず、将校になる出世コースに滑り込む。

公職に就こうと決心した市民は、司法コースか行政コースのいずれかを選ばなければならない。ほとんどすべての者がこの両系統の幹部の下に入って、そこで教育を受けるのだが、別の特種な専門部門に進む場合もしばしば見られる。空いているポストの数よりは候補者の方がはるかに多い。「大学出と否とを問わず、文官志望の若者の数は当方では周知の通り余りにも多く、どの講座もそうした者たちで溢れんばかりである。彼等の人数を、現実に存在する官職数と比べると、それも最高の死亡率を当てはめて計算した欠員数と比べてみて、これらの若者みんなに、あるいはその大部分に、彼等が準備に支払う犠牲・費用に多少なりとも見合うだけの配慮をしてやれる見込みは全くない。」⁽⁶⁾

司法官・行政官の人事公式記録を抽出して調べてみると問題の所在がよくわかる。才能がなければ文官のコースはたどれない。法学部を六学期学んで卒業した学生は、一般に裁判所の見習いとして実習を積む。才能に劣る者、あるいは野心のない者は、多数存在する都市裁判所の一つに行くが、たいていの者はもっと上の裁判所、本庁、上級裁判所、あるいはしばしば宮廷裁判所とも呼ばれる一種の控訴裁判所に向かう。各州には少なくとも一つの、しかししたいいは州を形成する領土がしだいに拡大していく結果いくつかのこうした裁判所がある。運の良い者はケーニヒスベルクかバルリンの最終審裁判所に入れてもらえる。これが極わめて重きをなす「最高法院」^{カッサーゲリヒト}である。この管轄はクーアマルク、ノイマルクの旧州を包括し、ここでの判決には高い権威がある。またここ

の職員は、残余の州を管轄するケーニヒスベルクの「上級控訴裁判所」よりも人数が多いし、優秀な人材が選ばれている。

十八か月か二年間記録係あるいは判事の助手として働いた後、聴講生たちは一般に易しい試験を受けて司法官^{ジュリッ}試験の肩書を得ると同時に、判事として下級裁判所での、また領主あるいは都市の裁判の判決にたずさわる資格も手にする。更に上級の官職を志願する場合は司法官試験として控訴裁判所にそのまま残る。ベルリンの「最高法院」にはハウスフークタイという下の部局があつて、これは「上級審」である控訴裁判所とははっきり分かれていたのだが、小さな地方の事件を扱って裁くことを委されている。ここでは二人の司法官試験が働いていて二人の記録係が助手についているが、その助手が聴講生を選抜する。控訴裁判所は、下級裁判所の控訴のための「指令判事会」と州の控訴裁判所の助言に当たる「上級控訴判事会」の二つの判事会から成る。これらの制度のお蔭でベルリンには多くの司法官試験がいて、他の何処よりも大試験のための準備がよくできるのである。彼等はしばしば第一審の都市裁判所のベテランの職員によつて選抜される。たとえばベルリン市裁判所の所長は一七八三年十月控訴裁判所の同僚に十六人の聴講生と十二人の司法官試験の成績評点を伝えている。彼等はいずれも貴族ではなく、この中の十人が「最高法院」にポストを得ることになる。⁽⁸⁾大試験は筆記と口述から成り立っていて、法律の理論と実際についての包括的知識を持っていなければならない。司法官試験を数年やって——平均五年——やっとこの試験に通る。合格すれば判事補^{アッセル}の肩書がもらえて上級裁判所か他の役所の顧問に任用されることができ⁽⁸⁾る。たとえば外表面でも外交官の一部は判事補から補充されるから、判事補は真の高等官吏の養成所といえる。

進路は厳密に決まっていいて各段階は明確に位置づけられているから特権の入り込む隙間はない。確かに有力な家族の息子がいくつかの段階を飛び越えて五年ではなく二年か三年で終了試験を受けることはありうる。筆記試験に際し、予め犯罪記録が渡されて受験生が家庭で下準備ができるというような、本来あってはならないルーズなケースもないではない。また、口述試験が長々と続いたり、枝葉末節の事柄が問われたりすることもある。これについてはいくつかの詳細な報告が役人の公式記録に残された。たとえばミンデンでは一八〇〇年にベッセルの司法官試補に訴訟規則と公法について三十四の質問（召喚とは何か？ 保釈の意味は？ 改革の権利とは何のことか？ ヴェストファーレン条約の意義は？ 教皇制度と司教制度の相違点はどこか？）と、ローマ法について七十五の質問（他権者養子縁組みと自権者養子縁組みの意味は？ 父権とは何か？ 動産及び不動産とは何か？ 取り引きとは何か？ 等々）をしている。⁽⁹⁾

大学で三年、研修生として二年を過ごした司法官試補は、任用される頃にはだいたい二十二歳くらいになっている。そうすると判事補は、自分の望む上級職が手に入る時点ではもう二十七歳である。官吏の給料についての詳細な資料がなく、また若い当人が行政・司法の養成機関にいる間にどうしても負担しなければならぬ交際費のことを考えると、試験前には生活が窮屈で必要なものもろくろく買えなくなるのも無理からぬことであるといえる。⁽¹⁰⁾

司法官としての経歴がもたらすものの意味を評価するためには、毎年の任用者の数を知る必要がある。州のいろいろな部局の事報の登録簿は任用にも及んでいるが、そこに挙がっている毎年の総数は、公式記録の数と細部を除いて大した違いはない。そしてその食い違いの持つ意味も必ずしも常に同じではないからこれを無視して、

登録簿から作られたリストをかまわず使うことにしよう。

そこでまた別種の厄介な問題が生じてくる。「最高法院」の公式記録のカタログを閲覧すると、実に驚くべきことに一八〇〇年以後任用が見当たらない。マルク・ブランデンブルクの各州の記録を調査してみてもやはり結果は同じである。しかし世紀が新しく代わってから司法官試補が一人も任用されなかったということはどうみても不自然である。もっともベルリンとポツダムの年鑑は一八〇〇年以後も「最高法院」の司法官試補の名前と住所を挙げているが、これらの名前はこの年以前のものとは別人である。してみると、この後また似たような事実が生じて同じ疑問を他の箇所でも立てなくてはならなくなればその時あらためて考えるとして、当時の記録の分類は、これらの名前を載せている登録簿や分類表が偶然に発見されるかどうかにかかっていたのだと今のところ認めてすませよう。とにかく各州がさまざまな登録簿を使って作成する司法官の任用の総リストは一八〇〇年をもって終わるのである。しかし分類表はその後も続き、時には昇任や退官にも言及しているが、編入には触れていない。一八〇六年まで記入されるように目録が作られている公式記録自体をよく調べても、一八〇〇年以降は任用の記入はない。年報による検証は、州により不定期に刊行されているため結局のところ不可能である。今日大学図書館にも、上級裁判所のある都市の図書館にも、十八世紀の終りあるいは十九世紀の初めの数年についての年鑑はない。

これは一八〇〇年以降、州における聴講生と司法官試補の任用を中止したことを意味するのであろうか？　このような重大な決定がなされたのであれば、方々の登録簿あるいは新聞等に出ない筈はない。「官房公式記録」の原本を限なく調べてみても何も出ていない。原則的な決定が下されることもなく、またそれが実行に移される

一八世紀のプロイセンの社会とロマン主義

に際し抵抗に遭うこともなく、人員過剰の裁判所が一斉に職員の新規採用を拒んだとすれば、公式記録には候補者からの任用請願や訴えが溢れるほど載るにちがいないし、これに応答する文書も残っている筈である。ただ例外的に人員過剰についての話も伝わっている。たとえば貴族でない三人の者が一七九九年、既に貴族が三人、貴族でない者が三人採用されたにもかかわらず、「最高法院」の大試験を受けることを拒まれている。挙げられた唯一の理由が「人員過剰」である。⁽¹¹⁾

しかしこうした種類の事例は政府の内部ではもっと頻繁である。もっともこちらでは任用が一八〇六年まで毎年定期的に行われたので同じ問題は起こってこないが。たとえば一八〇二年一月二十八日マクデブルクの陸軍官房・直轄官房はハレの司法候補生フリードリヒ・ヴィルヘルム・フォン・マーダイに対し、彼が司法官試補となることを拒んでいる。理由は「国王陛下より司法官試補並びに判事補の人数の既に余りにも多きが故にこれ以上の認可は甚だしく不適切である旨当陸軍官房・直轄官房に再三のお達しありしため」。⁽¹²⁾にもかかわらずフォン・マーダイは三月二十七日に認可を得るのである！

たぶん政府は、司法研修生と司法官試補職の候補者数の急増を煩わしく感じたのであろうと推測できる。その全体数は減少するどころか、むしろ新顔が増えて拡大する傾向にある。余りにも殺到してくるのでこの辺で歯止めをかけなければおさまりがつかない。一八〇〇年以降行政コースに入ることを難しくする試みがなされる。一八〇四年四月七日勅令が出されて、上級職を受験するすべての候補者は最低三か年プロイセンの大学で学んδειなければならぬことにあらためて注意を喚起する。ただしこの期限は、必要な知識を短期間の中に習得したことの大学側の証明である「アビトゥーアの証明書」を提出できる者に対しては短縮される。この勅令はしかしそ

れほど特に守られなかったらしい。向けられたのはハレ大学のみで、その他の大学には通達することを忘れたのである！ 止むを得ずレーマンという名の候補生は、これから受験しようとするフランクフルトにもこのことを伝達するよう十月に訴えを起こす。結局彼の訴えによつて政府はようやく試験委員会を組織するありさまである。⁽¹³⁾

一七八六年と一八〇〇年の間の司法機関と、一七八六年と一八〇六年の間の行政府について作成されたリストは、こういう次第で完全に遺漏なきを尽くしているとは言い難い。登録簿の示すところと公式記録の人数との間に多少の食い違いがしばしば見られるが、しかしこの程度の誤差なら各地にほぼ一様に散らしてしまえる。そうしたわけでリストが細部の点で絶対的に精確でないにしても、新規採用者数の動きを知るには充分であると言える。

総じて第一に分かることは、司法官の経歴は市民の歩む人生行路の中では最も重味のあるものであるということである。一七八六年と一八〇〇年の十五年間に八百四十一名の司法研修生と七百五名の司法官試補が州の上級裁判所に任用されている。他にそれぞれ二十名と百八十九名が「最高法院」に入れた。つまり総計千七百五十五名の任用であつて、これは年平均百十七名ということになる。司法研修生としての実習はたいして司法官試補となる前に済まされるということを前提として——新規採用の数を確かめるためにこの数字からもう一つ記憶に留めるなら、平均が研修生で五十七・四名、試補で五十九・六名である。この数字は、同じような方法で二十一年間について作成された行政官のリストの数字よりもはるかに高い。即ち行政官のリストでは僅か二百十八名の試補の任用があるに過ぎない。これは年平均にすると十三・二名である。数の圧倒的に少ない研修生はすべての官房にいるわけではない。もっとも司法研修生は行政官試補になることができるのであるが。

一八世紀のプロイセンの社会とロマン主義

第二に、この人数表を丹念に検討すると、貴族でない者の司法機関において占める割合が特別の意味を持つことが分かる。一七五五年に挙げられている官吏の中では百七十八名だけ、つまり、一〇・一五パーセントが貴族である。この百分率は州の九・七六パーセントから「最高法院」での一三・三九パーセントに上昇する。選ばれた官吏の職は貴族には好まれて、しかもある程度彼等に占められているようである。州相互間の比較では貴族の割合は旧州や——ベルリンのように——市民階級が強く伸びてきた地方で比較的高いことが認められる。マクデブルクでは貴族が司法研修生と司法官試補のポストの二〇・一七パーセントを占めるし、クレーフフェーラフェンスブルクでは一五・五三パーセント、ポンメルンで一〇・八五パーセント、ミンデンで一〇・七五パーセント、クーアマルクで一〇・七一パーセントである。これに対し東プロイセンあるいはつい最近領土となった西プロイセン州では割合が五・〇五や五・三四パーセントに下がる。このように貴族は市民階級の勢力の強い地方で進出し、市民は貴族の領地の多い地方でポストをほぼ独占している！ この見かけの矛盾は、領地に住みついた貴族はよく働き、軍隊に入り、司法研修生や司法官試補にそれほど敬意を払わず、彼等の中から自分の領地の裁判所の判事を奉公人のように選んで連れてくる、一方これに対し領地に居城を構えない貴族は高官職を望み、そこへ到達するヒエラルヒーの段階で市民と争う、という事実によって説明されるであろう。毎年の任用の配分を計算すると、まず司法研修生と司法官試補の間には一種の均衡が保たれているという印象を受ける。司法官試補の人数が増えると司法研修生の人数は減るかも知しくは変わらない。両者を合計すると一七八六年の八十七名から一七九九年の百二十九名まで、毎年人数は異なるがしかしカーブは確実に上昇している。四百七十五名、五百四十名、五百五十一名という五年毎の合計数もこの発展をよく物語るものである。一七九〇年と一七九五年の間に大

きな上昇が見られる。貴族の占める割合にも、それほど明確に認められないにしても同様に上昇の傾向がある。即ち九・八から一〇・七五に上がって、その後一七八五年から一八〇〇年の間にまた一〇パーセントに下がる。この上昇の起点を探ってみると、世紀末の候補者の大多数がクアマルクの出身であることが分かる。一七九二年から一七九五年の間は任用の大部分がこのプロイセンの両州で行われているが、これは第二次・第三次ポーランド分割と関連があるものと思われる。

最後に、官職の位が高くなればなるほど、貴族の占める割合は高くなっていくことが認められる。一七八八年と一八〇〇年の間に任用された司法研修生と司法官試験の場合、一〇・一四パーセントを占めるに過ぎないのに対し、高官を望める判事補になるとその割合はもう一一・六五パーセントになる。一八〇〇年の司法官の幹部リストに依ると、三百十五名の顧問官の中、百十五名が貴族である。一八〇一年では顧問官は三百二十二名を数えるが、その中の百十二名が貴族であり、従ってその割合は一〇パーセントから三三パーセントに上がっていることになる。

（訳者付記）第二章の注は、次号掲載分と一括して章の終わりにまとめることとする。